



【感染症だより】

～溶連菌感染症について～

インフルエンザがだいぶ下火になりましたが、継続して出ているのが溶連菌ようれんきんです。この冬、インフルエンザと同時に溶連菌に罹っている人が何人もみられました。インフルエンザではあまり咽のどが赤くなりませんが、溶連菌では大抵咽が赤く痛くなります（無症状で保菌していることもあります）。

溶連菌感染症は、医療機関では咽のぬぐい液の簡易検査で、5-10分程度で診断されます。主な症状は、咽頭痛、発熱、目の充血、イチゴ舌（ベロが赤くなる）、発疹（細かい赤い発疹が主に体幹に出ます）などです。他に、中耳炎や副鼻腔炎（蓄膿症）、とびひ、蜂窩織炎、丹毒、重症になると肺炎や、菌血症、トキシックショック症候群などを起こすことがあります。また、**続発症のリウマチ熱や腎炎**があり、抗生物質による治療が欠かせません。

普通の風邪であれば、抗生物質はまず効果がないので必要ありませんが、溶連菌の場合には必要不可欠です。通常、溶連菌の治療には抗生物質を3日～10日間内服しますが、これは、治療と同時に除菌をするためです。抗生物質治療をしなかった場合、溶連菌が咽にくっついたまま（保菌）の状態となります。保菌のまま放置すると、繰り返し発病することになり、続発症を起こす可能性が高くなります。この続発症は、抗生物質治療が普及している先進国ではめったに見られなくなりましたが、いまだ現在日本国内でも患者さんが発生しています。リウマチ熱を発症すると、発熱と共に、皮膚の輪状紅斑、心炎、舞蹈病（不随意運動がおこる病気）といった症状が出ます。特に心炎は後に心臓弁膜症という病気のもとになり、後遺症として残ってしまいます。また、腎炎を起こすと、急に血尿・蛋白尿が出て、高血圧や浮腫が出現し、子どもでは高血圧による痙攣を起こすこともあります。これらの続発症を防ぐためにも、溶連菌の抗生剤治療は欠かせません。

表：2月しみず小児科・内科クリニックで診断された流行性の感染症

	感染症	患者数
1	インフルエンザB	162
2	溶連菌	90
3	インフルエンザA	70
4	胃腸炎	40
5	RSウイルス	6
6	突発性発疹	4
7	アデノウイルス	1
7	水痘	1

★病児保育室あんずからのお知らせ★

ご予約時に満室でお断りする事がありますが、当日朝キャンセルされるも少なからずおられますので、当日朝、お電話予約再度チャレンジされることをお勧めしています。現在、空き状況をWebで情報配信する準備をしております。準備出来次第、ご案内致します。

文責： 清水マリ子

